

平成 18 年度(第 50 回)  
岩手県教育研究発表会発表資料

外 国 語

## 中学校英語科における 書く力を高める指導に関する研究

ーコミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と  
4 領域を関連させた総合的な言語活動の工夫をとおしてー

研究協力校  
花巻市立大迫中学校

平成 19 年 1 月 9 日  
岩手県立総合教育センター  
教科領域教育室  
千葉 龍太郎

## 〈 目 次 〉

I	研究目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の年次計画	1
IV	本年度の研究内容与方法	2
1	目標	2
2	研究内容与方法	2
3	研究協力校	2
V	研究結果の分析と考察	2
1	中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本的な考え方	2
2	中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想	3
3	コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導のための手だての試案	4
4	4領域を関連させた総合的な言語活動の立案と指導実践計画	7
(1)	コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と4領域を関連させた総合的な言語活動の工夫	7
(2)	指導実践計画	10
(3)	検証計画	11
5	指導実践の概要及び実践結果の分析と考察	13
(1)	指導実践の概要	13
(2)	実践結果の分析と考察	23
6	中学校英語科における書く力を高める指導に関する研究のまとめ	26
(1)	成果	26
(2)	課題	27
VI	研究のまとめ	27
1	研究の成果	27
2	今後の課題	28

[おわりに]

【引用文献】

【参考文献】

## I 研究目的

中学校英語科では、生徒に実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことが求められている。特に「書くこと」の領域においては、与えられた語や文を書き写すことができるだけでなく、自分の考えなどを書くことができることを重視している。しかし、本県の学習定着度状況調査の結果を見ると、目指す能力が十分に身に付いているとは言えない。特に「書くこと」の正答率は他の領域に比べて著しく低い状況が見られる。

英語が書けない理由には、①語彙が習得されていない、②基本的な文法や語順が理解できていない、③まとまりのある複数の文を書くことに慣れていない等、様々なレベルの要因があると考えられる。これまでの「書くこと」の指導は、単語や基本文の書き取り等、繰り返し練習して覚える活動に重点が置かれてきた。しかし、こうした練習のみでは断片的な記憶にとどまりがちで、語彙や英文構造の定着が十分に図られなかった。また、授業の中で実際にコミュニケーションを目的として書くという経験も不足していたと考えられる。

こうした状況を改善するためには、まず、基本的な語彙や、文法や語順等の基本的英文構造の知識といった、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導を継続的に行う必要がある。その際、単なる反復練習だけでなく、実際にコミュニケーションを図る活動と連動させて指導することが重要である。そして、そのような基礎的能力を基に、「書くこと」の領域と他の領域（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」）とを関連付けた総合的な言語活動につなげていくことが大切である。そこで、この研究は、コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導と、4領域を関連させた総合的な言語活動の工夫をとおして、中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を明らかにし、学習指導の改善に役立てようとするものである。

## II 研究仮説

中学校英語科において、次のような指導を行えば、書く力を高めることができるであろう。

- ・ コミュニケーションと連動した音読活動を単位時間に設定し、継続的な指導でコミュニケーションを支える基礎的能力を培う。
- ・ コミュニケーションを支える基礎的能力を基に「書くこと」の領域を他の領域と関連付けた総合的な言語活動を行う。

## III 研究の年次計画

この研究は、平成17年度から平成18年度にわたる2年次研究である。

### 1 第1年次（平成17年度）

- (1) 中学校英語科における書く力を高める指導についての基本的な考え方の検討と基本構想の立案
- (2) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の具体的な手だてを組み入れた試案の作成
- (3) 研究協力校におけるモデル授業の実践と研究協力校による実践の継続
- (4) 研究協力校と合同での試案の修正

## 2 第2年次（平成18年度）

- (1) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の実践の継続
- (2) コミュニケーションを支える基礎的能力を基にした総合的な言語活動の指導計画の立案
- (3) 指導計画を基にした授業実践及び実践結果の分析と考察
- (4) 研究のまとめ

## IV 本年度の研究内容と方法

### 1 目 標

第1年次に作成したコミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導の試案と効果的に結び付けた総合的な言語活動の指導計画を立案し、授業実践を行い、結果の分析と考察を行う。

### 2 研究内容と方法

- (1) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導の分析と考察及び修正（授業実践、面接法、観察法）
- (2) 総合的な言語活動の指導計画の立案（文献法、面接法）
- (3) 指導計画を基にした授業実践及び実践結果の分析と考察（授業実践、観察法、面接法）
- (4) 中学校英語科における書く力を高める指導に関する研究のまとめ

### 3 研究協力校

花巻市立大迫中学校

## V 研究結果の分析と考察

### 1 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本的な考え方

本研究は、書く力を高めるために、「聞くこと」「話すこと」を中心とした日常授業における語彙や文法（基本表現）の指導を、コミュニケーションと連動した音読指導をとおして、実践的なコミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導に改善し、「初歩的な英語（単語や基本表現）を正しく書くことができる生徒」の育成をねらうものである。また、このような基礎的能力を基に、生徒に実践的なコミュニケーション場面での経験を積み重ねさせる工夫をすることにより、「状況や場面に応じて自分の気持ちや考えを適切に書くことができる生徒」の育成を目指す研究である。

学習指導要領における「書くこと」の目標は、「英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする」ことである。それは、学習指導要領に言語材料として示されている英語を用いて、コミュニケーションのための自己表現を図るようにすることである。

よって本研究における書く力が高まった生徒の姿を次の【表1】のようにとらえた。

【表1】中学校英語科における書く力が高まった生徒の姿

	中学校英語科における書く力が高まった生徒の姿
①	状況や場面に応じて自分の考えや気持ちを適切に書くことができる（コミュニケーションとして書く力が養われた姿）
②	初歩的な英語（単語、基本表現）を正しく書くことができる（言語材料が定着した姿）

①は実践的な場面や状況において、コミュニケーションのための自己表現ができるようになった姿を表している。言語材料を正確に覚えるだけではなく、実際の場面で活用できる生徒の姿である。

②は①の姿を実現するために必要な言語材料が定着し、自分の考えや気持ちなどを表現する力を支える基礎的な能力が身に付いた姿である。従来の「書くこと」の指導は②の姿を実現してから、①の姿を実現しようとしていた。しかし、①と②は相補的な姿であり、①の姿を実現するための言語活動と、そのために必要な②の姿を育成していくという指導のバランスの工夫が大切である。

本研究では、この書く力が高まった姿から、中学校英語科において、育成すべき書く力を、次の【表2】の構成要素でとらえることにした。

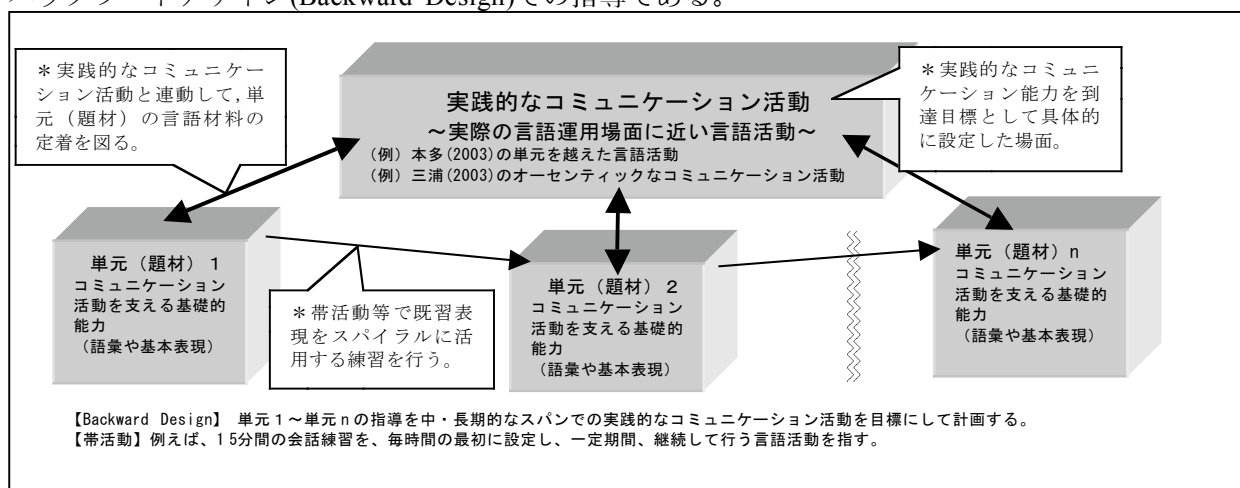
【表2】中学校英語科における書く力の構成要素

構成要素	意 味	
コミュニケーションとして書く力	コミュニケーションを支える基礎的な能力を基に、言語の使用場面や言語の働きをとらえて、自分の考えや気持ちを適切に表現できる	
コミュニケーションを支える基礎的な能力	①語彙力	初歩的な英単語・連語についての知識・理解が身に付いている
	②文法力	基本表現の構造（語順）についての知識・理解が身に付いている
	③音と文字をつなぐ力	初歩的な英語（英単語・連語・基本表現）を綴りから音声化できる

## 2 中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想

中学校英語科における指導の重点は「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践的コミュニケーション能力の育成に置かれている。したがって、書く力を高める指導も、音声コミュニケーションに重点を置き、そこに「書くこと」の指導を関連付けるという方向性が望ましい。

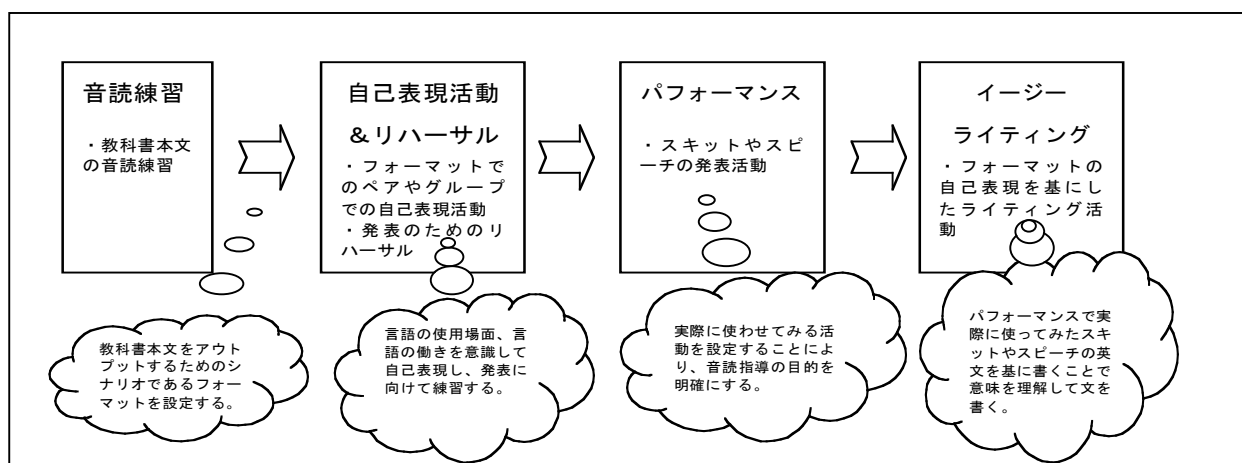
本研究では本多（2003）、三浦（2003）の示した「聞くこと」「話すこと」を中心とした指導を基に「書くこと」の指導を関連付けている。これらの研究に共通するのが、言語の使用場面や働きを具体的に設定した自由度の高いコミュニケーション活動を、中・長期的なスパンで単元終了後や学期ごとに設定し、その活動に必要な言語材料の理解と練習を日常授業で行っていくという、【図1】バックワードデザイン(Backward Design)での指導である。



【図1】「話すこと」の領域における実践的コミュニケーション能力を育てる指導

本研究では「書くこと」の指導を関連付けるために、教科書の音読を手だてとして用いる。「初歩的な英語を正しく書くことができる」を実現するためには、単語や基本表現を繰り返し書いて練習することは必要不可欠であるが、従来の指導では音声中心の授業と家庭学習等で繰り返し書かせる練習が直接つながっていなかった。綴りから単語や基本表現を音声化し、意味も理解できるよう

にするための力を培う指導が必要なのである。中学校の一般的な英語の指導過程において、この音と文字をつなぐ力を培うために効果的かつ効率的な指導が音読である。



【図2】フォーマティブインプット&イージーアウトプットの基本的な流れ

國広・千田（2001）は知的記憶（語彙力・文法力）を実際に言語を運用する技能である運動記憶に変えるトレーニングとしての音読が、英語運用能力を高めるために有効であると指摘している。このトレーニングで培われる運動記憶が本研究における音と文字をつなぐ力である。教科書で学習した語彙や文法を、音読をとおして、音と文字をつなぐ力として育成していくことが、音声中心の授業と「書くこと」の指導を関連付ける視点である。しかし、言語を実際に使用することを意識することのない音読の繰り返し練習では生徒の言語運用能力は育成されない。生徒が実践的なコミュニケーション場面での使用を意識して、音読練習に取り組むための指導の工夫が必要である。このような考えに基づいて構想した手だてが、【図2】で基本的な流れを示した、フォーマティブインプット&イージーアウトプットである。この指導を、実践的な場面でのコミュニケーションを目的として書く経験を積ませる言語活動と結び付けて行う。以上のことを基に、実践的なコミュニケーション能力を具体化した到達目標としての総合的な言語活動を設定し、基礎的能力を培う指導をバックワードデザインする基本構想を5頁【図3】のように立案した。

### 3 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う継続的な指導のための手だての試案

本研究では、総合的な言語活動と結び付ける手だてであるフォーマティブインプット&イージーアウトプットを、一般的な英語の授業の「音読練習」の過程に位置付け、【表3】の指導手順を提示した。

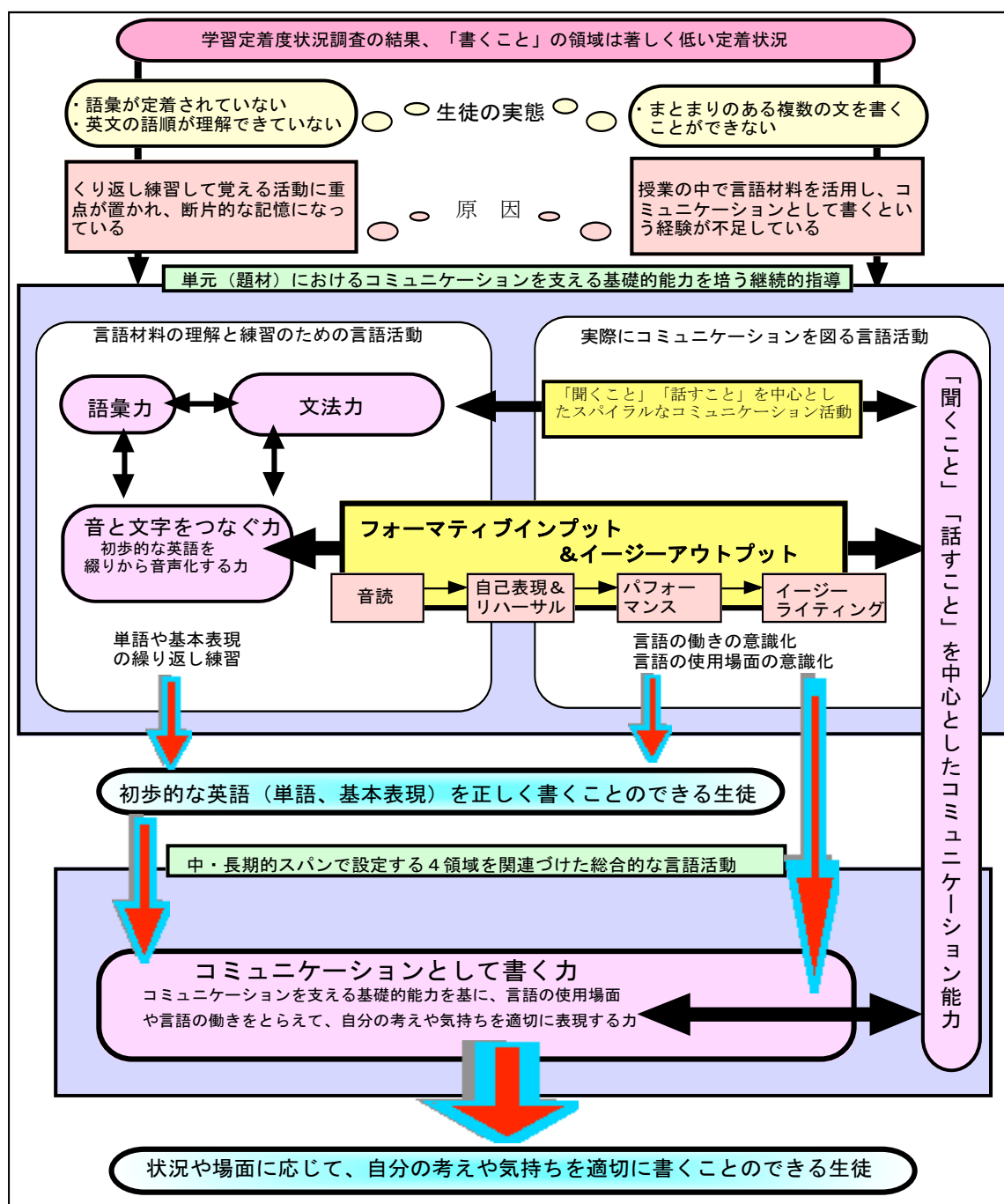
【表3】フォーマティブインプット&イージーアウトプットの指導手順

手順	フォーマティブインプット&イージーアウトプット（F & E）の指導手順	
①	音読により文字（単語や基本表現）を音声化する練習を行う	フォーマティブインプット
②	自己表現を加え、発表のためのリハーサルを行う	(Formative Input)
③	パフォーマンスによる自己表現活動を行う	イージーアウトプット
④	「話すこと」の自己表現活動と「書くこと」の活動を関連付ける	(Easy Output)

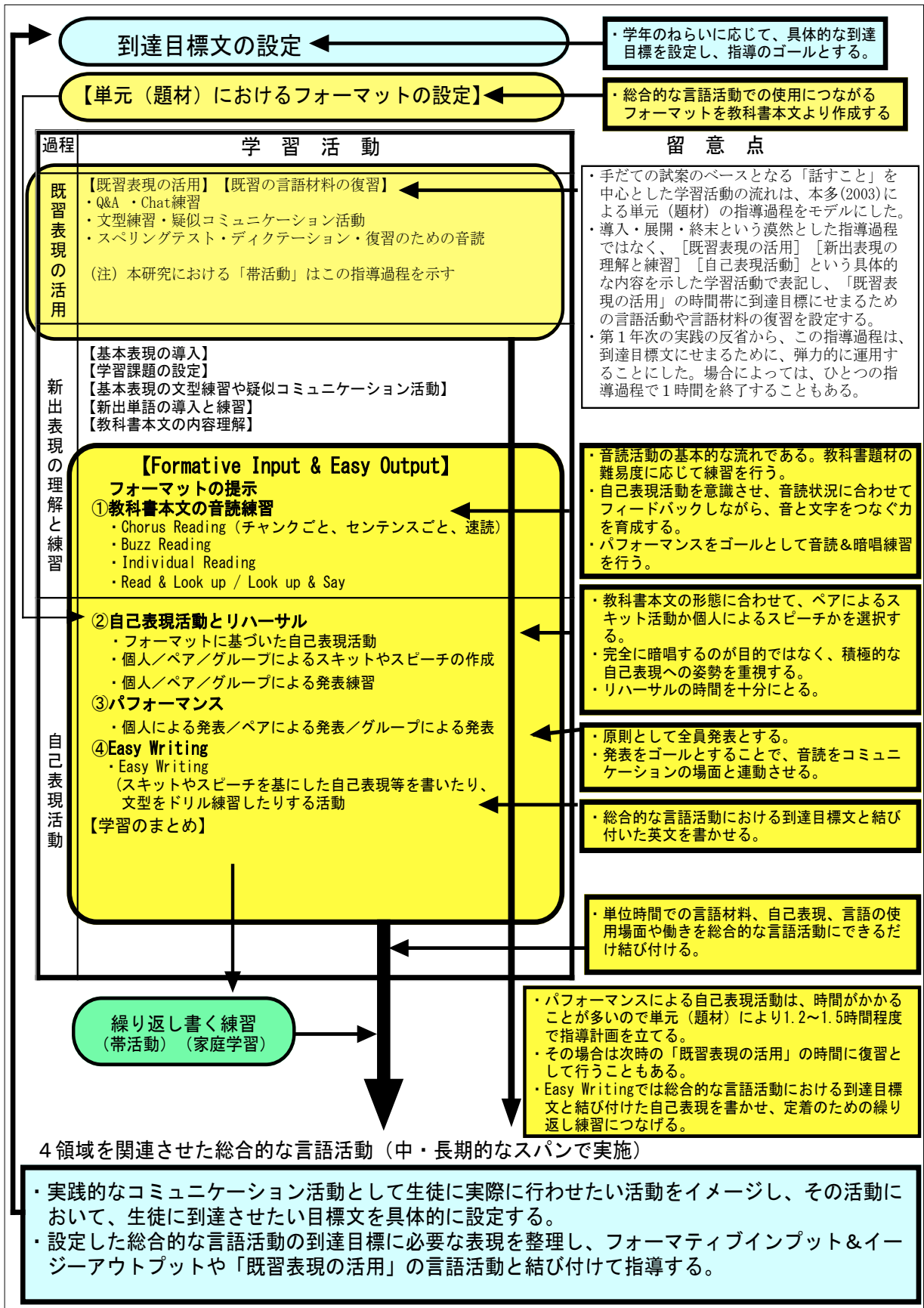
「聞くこと」「話すこと」を中心とする言語活動に「書くこと」の言語活動を結び付ける活動がイージーライティングであり、パフォーマンスでの自己表現を基に英語を書く活動である。④は生徒自身が自己表現した英語を基にしているため、教科書本文の言語材料を基に、言語を実際に使用

することを意識して英語を書く活動になる。また、音読とリハーサルにより、音と文字をつなぐ力が培われているので、語彙や基本表現の定着を目的とした繰り返し書く練習においても、効果的に基礎的能力が培われる。

以上のことを基にして、フォーマティブインプット&イージーアウトプットを取り入れた手だての試案を次頁【図4】のように作成した。試案は、フォーマティブインプット&イージーアウトプットを手だての中心とするが、本多（2003）の「話すこと」の領域における実践的コミュニケーションを育てる指導過程をモデルにし、既習表現を活用する言語活動を行うための帯活動も指導過程に位置付けた。本研究における帯活動とは、実践的なコミュニケーション活動と結び付いた「既習表現の活用」のために1単位時間に約15分の時間で、継続的に設定する言語活動である。



【図3】中学校英語科における書く力を高める指導に関する基本構想図



【図4】 コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導のための手だての試案